歳時世相篇 18

ホーおじさんの九月二日
ベトナムの国慶節

国慶節の9月2日、マスコミはプロパガンダを繰り返し、町じゅうがお祭り騒ぎの喧噪に包まれる。そういう都市部とは別に、それぞれにお祭りを楽しむ少数民族がいる。タイ、ラオス、雲南省などにも居住する黒タイは、ベトナム北部では70万を越える人たちが暮らす。中国でミャオとよばれるモンは、タイ、ミャンマー、ラオスなどにも暮らし、それぞれの伝統にのっとりつつこの日を祝う

樫永真佐夫（かしながまさお）
民博 民族社会研究部
ベトナム西北地方の黒タイ村落を主なフィールドとして、伝統文化の継承を研究している。

九月二日。この日は、ホーおじさん、ことホーチミンのベトナムと深い縁がある。ざっと六〇年あまり、さかのぼってみよう。

独立と戦いの日々のなかで

一九四五年三月の「仏印処理」で、日本軍は仏印軍を武装解除した。それも束の間、八月一五日には、ご存じのとおり日本は連合国に無条件降伏した。これを機に、ベトナム独立同盟（通称ベトミン）が八月革命を起こし、各地で蜂起が相次ぐ。

まもなくベトミン指導者ホーチミンは、ハノイのバーディン広場で、ベトナム民主共和国の独立を宣言する。九月二日のことである。だから、この日が現在でも国慶節として、国民の祝日である。

しかしベトナムは、すぐにフランス、アメリカをはじめとする大国を巻き込んだ長い戦争に突入する。ベトナム戦争まっただ中の一九六九年、ホーチミン国家主席は、南北統一を見果てぬまま、死去してしまう。命日は、奇しくも九月二日。

その六年後の四月三〇日、南ベトナムの首都サイゴンが陥落して、ようやくベトナム戦争は集結した。遺言で、「遺灰を北部、中部、南部に分けて埋めてほしい」と、ホーチミンは希望した。しかし、二大共産主義国ソ連のレーニン、中国の毛沢東と同様、遺体は防腐処理されて、永久保存されることになった。バーディン広場前にホーチミン廟が建てられ、そこに安置された。これまた九月二日。

ホーチミンは、この日に国を生み、この日に自身が死に、この日に骨肉が永遠の生を得た。

豊かになったハノイ

九月二日、テレビをつけてみる。国内のどのチャンネルも、ベトナム諸民族がいかに団結しあって、苦しさを堪え忍び、独立を勝ち取ったか、朝から晩まで、人民の勝利を一心に称えている。戦勝を記憶している者には、苦難の末の栄光を繰り返し追体験し、現在の幸福をかみしめる、たまさかの機会かもしれない。

しかし、三〇歳以下の戦争を知らない世代は、白黒で質が悪く、音も割れたフィルムでリピートされる、抑圧と貧困という薄暗い昔語りに、もうウンザリしている。ファシスト日本だの、植民者フランスだの、賊アメリカだのと、日がな一日、枕詞つきの悪罵（あくば）をテレビで聞かされる外国人も、やはり飽きて外に出る。

当然ながらハノイ市内は、日頃よりひどいバイクの洪水と喧噪である。繁華街では、あちこちに戸外ステージを設けて、歌謡ショーをおこなっている。どうせただ徘徊しているだけのバイク族、一度はそこで停止して、野次馬になってみる。渋滞はいっそうひどくなる。しかも、もともと後ろがつっかえていることを気にするような人たちではない。それを無理にどかそうとクラクションを鳴らすから、ますます喧しい。

街角に厳粛な雰囲気などなく、一日中、お祭りの狂騒である。宵になると、バイクで暴走行為を繰り返す若者も出没するので、ぶつけられてはたいへんだ。ふつうの日でも、接触事故など日常茶飯事なのだから。

そんなわけで、国慶節の前後は、ハノイを離れて旅行に出る家族も増えてきた。それだけの経済的余裕も出てきたのである。

まもなく農繁期

ラオス国境に近い西北地方には、違った国慶節の迎え方がある。むしろ、「あった」と言ったほうが、もしかすると正確かもしれない。西北地方で国慶節を過ごしたのは、もう何年も前で、ベトナムでは一年ごとの変化がほんとうに大きいから。

陽暦九月、ちょうど乾季がやってくる時期。盆地を灌漑して水田を作っている黒タイの村人たちにとっては、米の収穫がまもない。まもなく農繁期に入るのだ。

着飾って山から町に出てきたモンの人たち

ある若者は、「前日まで雨がふったり、曇ったりしていても、国慶節の日だけは決まって晴れる」と語った。実際、筆者は、その前日まで空の低いところまで垂れこめていた、厚い濁った雲が、この日、にわかに追われて駆け出し、天照らす光が天下を占めるのを、神々（こうごう）しい感動をもって眺めたことがある。

そんな昼下がり、村の少年少女たちは、自転車に乗って市場を目指した。筆者も増水した川を歩いて渡り、苦労して市場に行ってみた。せっかくのおめかしを、ぬかるみの泥で台無しにした若者たちが、ものを買うお金もなく、往来を眺め、友人たちと話し、じゃれ合っていた。家事もあるので、夕飯時には家路につかなければならない。それだけだ。しかし、それだけの思い出作りが、若者には非日常的なのだ。

歌垣を楽しむモンの男女

市場の近くには、色鮮やかな伝統衣装で着飾ったモンの若者も、男女ごとにいくつかグループを作っている。モンは、山頂近くに村を作っている。中には、二〇キロも離れた山奥から歩いておりてきている者もいると聞く。現地のインフラ状況からすれば、いかにもありそうなことである。

彼らは、黒タイの若者たちとは、気合いの入り方が違う。夜になると、男女が歌のかけ合い、恋のかけひきを繰り広げることになるからである。万葉集で知られる、歌垣に通底する習慣だろうと思われる。

モンは、北部でもっとも同化がうまく進まず、ホーチミンだの、独立だのに、一番縁遠そうな人びとである。かれらがなぜ国慶節の日に、こういう伝統的な行事をおこなうようになったのか、その経緯は詳しく知らない。

でも、次のことだけは明らかだ。国が生まれ、国父が死んだこの日が、非日常性を演出するための国民の祝日として、人びとのあいだに、もうすっかり根付いていることだ。